

陳舜臣さんを語る会通信

NO.125 Oct. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2024年10月1日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

水上勉(1919-2004)と陳舜臣(1924-2015)の老舎描写

陳舜臣さんの作品で老舎に言及したものはごく僅かです。一方、水上勉氏は、1965年、来日中の老舎に会い、1979年には、北京の豊富胡同の家に遺族を訪ね、…、そのことにふれた作品をいくつも書いています。

1. 水上勉と老舎(ろうしゃ 1899-1966)の縁

関西日中関係学会主催 講演・シンポジウム 「21世紀の日中関係を見据えて」(1999年)

この度、書類を整理していて、表に「21世紀の日中関係を見据えて」と書き入れのある紙袋を見つけた。紙袋には、会のプログラムと資料が入っていた。

25年も前の出来事だ。

会合には、のち、2012年にノーベル文学賞を受賞する莫言氏の講演もあり、会場となった東亜ホール(トア・ロード 中華会館)は満席だった。

会合は竹内実先生(京都大学名誉教授)の講演「中国人のこころと生活—コオロギの相撲と魯迅」ではじまった。ご講演で、魯迅がどう話されたかは忘れてしまったが、なぜか、水上勉著「こほろぎの壺と柿」を引用し、水上と老舎のやりとりを話されたくだけはよく覚えている。今回、一度ちゃんと読んでみようと思い立ち、図書館から、「こほろぎ…」が収録されている『北京の柿』を借り出した。

水上勉と老舎のただ一度の出会い

1965年の春、老舎を団長とする中国作家代表団が来日した。老舎はこの時、一行の行事とは別に通訳ほかごく小人数で水上家を訪れた。一度きりの、水上と老舎の心の通った出会い語らいであった。

この時、二人は、こほろぎを闘わせる中国の風習について語り、また、水上は老舎に、「機会があって中国を訪れられたら、まっ先に黄梅県東禅院を訪れたい」といった。

「こほろぎの壺と柿」
「北京の柿」「東山の枇杷」など参照。



潮出版社発行『北京の柿』装画は東山魁夷

水上勉と老舎およびその遺族との出会い

水上勉全集⑳及び新編⑯付録「年譜」参照

1965	3月24日から4月28日まで、老舎を団長とする中国作家代表団来日	5月19日～6月7日、水上勉、作家代表団の副団長として訪中。この時はすでに四人組は追放されていて、北京飯店の一室で老舎の遺族(胡絮青夫人と長女・舒済さん)と会い、老舎晩年の苦悩の日々、不当極まるひどい仕打ちを受けた最期について聞く。「若者らの迫害に抗して、いたたまれない立場に追いつめられた先生の胸中を夫人が涙をにじませて語られる言葉の端々に、当時の地獄のありさまを想像して深いかなしみを味わわずにおれなかった」「北京の柿」『北京の柿』
	帰国一週間ほど前、日本文芸家協会主催老舎一行歓迎午餐会開催。席上、老舎が話した壺の話に広津和郎が反応(井上靖「壺」『星と祭』)	
	この間、老舎は井上靖宅や水上勉宅を訪問。水上はこの時の老舎との対話について「こほろぎの壺と柿」『北京の柿』ほかに記述	1978
1966	文化大革命はじまる。1976年9月、毛沢東死去。10月、江青ら四人組逮捕。公式終了は77年8月	
	【以下は中山時子編『老舎事典』「年譜」に拠る】	
	老舎、8月23日、殴る蹴る、の暴行を受ける。	1979
	8月24日、「四人組」の迫害を受け、無念を抱きながら望みを果せぬまま北京徳勝門外太平湖で亡くなる	6月、水上勉、約二週間、中国に取材旅行。北京の豊富胡同に老舎の遺族(前述の二人)を訪ねる。友人、張和平氏が同道、通訳を務める。庭にある二本の大きな柿の木が話題に。「この柿は私もここへ越してきた際に、ふたりで植えたものでございます。老舎は、柿が大好きでした」。あと、夫人とお嬢さんとともに、八宝山墓地の老舎のお墓に参る。水上はその日の夜行で北京を発ち、湖北省黄梅県の東山東禅院参詣の旅に。「北京の柿」「東山の枇杷」『北京の柿』
1975	5月8日～27日、水上勉、訪中作家代表団(団長井上靖)に参加。北京訪問時、老舎の消息を探る。老舎の死が確かであることを知らされたが、遺族に会うことは許されなかった	

2. 水上勉、1979年、豊富胡同に老舎の遺族を訪ねる

水上勉「北京の柿」の冒頭

王府站の繁華街をぬけて、車はしばらく古い商店のならば大通りを走っていたが、まもなく、左折して、人通りの少ない住宅街のとは口で停った。「豊富胡同」と露地の角に打ちつけられた横板の掲示が読めた。日本にいても、この町の名は念頭をはなれずにあつた。老舎先生のお宅のある街だった。…。

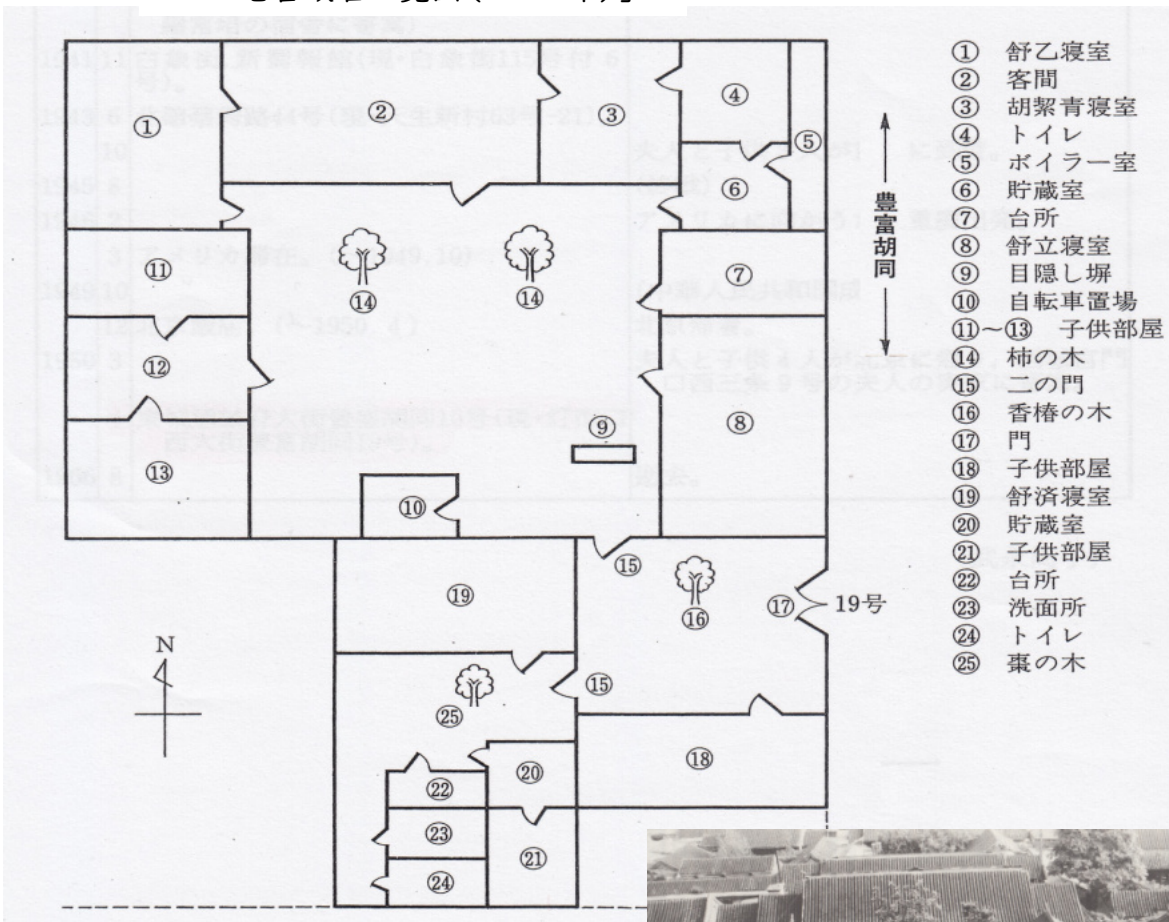
しばらくゆくと右手に入る露地があつた。一緒に来た友人の張和平さんが、こっち、こっちとよぶので、随いてゆくと、先の方に土塀のとぎれた一角があつて、そこに、見おぼえのある瘦身の舒濟さんが立っていた。私たちに気づくと足早やにきて、白い半袖ブラウスを着た上半身をこごめて手をさしのべてきた。

「ニイホウ、スイシャンメン（こんにちわ 水上勉さん）」（ ）は編集委員の加筆。



老舎故居 左右に大きな柿の木 北京旅游网より

「老舎故居一覽図(1986年)」



左の「老舎故居一覽図(1986年)」は、中山時子編『老舎事典』(大修館書店)より転載。老舎の本名は舒慶春。夫人は胡絮青。長女舒濟、長男舒乙、次女舒雨、三女舒立。

右の画像は『現代視点・中国の群像 項羽・劉邦』(1985 旺文社)より転載。

一般的な四合院。もとは一家族の住み家であったが、現在の住宅事情では、多家族が長屋のように利用していることが多い。



3. 陳舜臣さんの文化大革命観

「文化大革命」とは奇異な言葉です。「革命」は「易姓革命」などと使いますが、天命により時の支配者及び政治・政体が変わることです。つまり、ここで「文化」とは政治・政体とイコールなのですね。日本人には分かりづらい。

『日本人と中国人』

陳舜臣

4 政治すなわち文化

ある朝、新聞をひろげると、三島由紀夫、安部公房、石川淳、川端康成の四氏が、

——中国の文化大革命は学問芸術の自由を侵す。という声明文を発表したと報じていた。

昭和四十二年のことである。

私は反射的に、これはまきれもない『日本のもの』だと思った。

それはともかくとして、私はここで文化大革命を批判しようとするものでもなく、それを批判した四氏の声明文を批判するつもりもない。

日中兩國の相違点の一つの例として、四氏の声明文に登場していただきたいのである。

——学問芸術を終局的に政治権力の道具とするような思考方法に一致して反対する。

という言葉で、四氏の声明文は結ばれている。

学問芸術、文化を、政治権力と対立するもの、すくなくとも離れたものとみる考え方は、きわめて日本的である。

中国の政治理想は、『礼楽の治』であり、礼楽はすなわち文化のことなのだ。

——郁々乎として文なる哉。

——論語

と孔子が言ったのは、周の政治をたたえたのであり、政治すなわち文化であるという前提に立文化と政治がひきはがせない以上、別種の文化を導入しようとするとき、それは手のきれいなサロン活動ではなく、血なまぐさい政治活動とならざるをえない。

つまり、政体改変につながる。

自分のからだのすみずみまで通っている血管を食いやぶろうとする別種の血液にたいしては、その政体は死を賭して戦おうとする。挑むほうも必死である。

文化活動は遊戯ではない。

中国の歴史は、われわれの前に、血にまみれた文人の長いリストをつきつける。

日本人になじみぶかい名前に、自殺した屈原や、正気の歌の文天祥がある。

文章は経國の大業

中国の文人が、ほとんど例外なく政治的になることを、日本でははながはがしく思ふ人が多い。うだ。しかし、それは

——文章は経國の大業にして不朽の盛事なり。

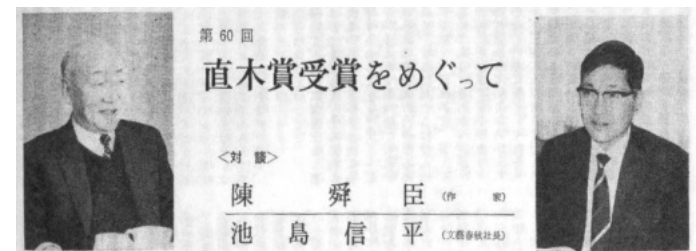
——という言葉を、中国の文人がいまだに空疎な修飾語とみていないからである。

文化大革命の記事を読んで

——どうして作家たちのやっているささやかなことに、いちいち目くじらを立てるのか？と思う日本人が多いだろう。

精神の改革者はロマンチスト

池島 ちよつと話題が変わるんですけれど、最近の中国の文化大革命はちよつと私なんかの乏しい知識じゃ理解できないし、ただ、中国という国は非常に大きな国で、万里の長城をつくったり、思いきって儒家の書物を全部焼いてしまったり、日本人から見たらスケールも何十倍も大きい国だから、ああいうことも起こり得るといふことも言えるが、



『新刊展望』(1969年4月号)

……。(中略) ああいうちよつとわれわれの理解に絶する大きな変革というか、実験をいまやっている。いったいこれはどういふことなのか……。

陳 いまおっしゃった秦の始皇帝の変革もその一つでしょうね。それから下がって前漢と後漢の間の王莽の篡奪のときも、やはりそういうような人間の精神の改造を志したようなところがありましたね。(中略) 百年ほど前の

太平天国のときもそれをやったと思うんです。

だから、ああいうことをやった人は、私は秦の始皇帝にしる、王莽にしる、あるいは太平天国の洪秀全にしる、ロマンチストだったと思うんですよ。……。

■ 陳さんは、文化大革命のような例として、中国史上の始皇帝の変革、王莽の「新」、洪秀全の「太平天国」をあげ、当事者三人を、「人間の精神の改造を志したロマンチスト」と、むしろ肯定的に評価し、毛沢東についても、また、同じ文脈で話されています。

4. 陳舜臣さんが老舎に言及した数少ない作品の一つ「茶館の時代」

『雲外の峰』 「茶館の時代」

初出は一九八三年九月、中国話劇「茶館」上演プログラムです。

引用します。

老舎が『茶館』を書いたのは、五十八歳のときだから、ほばいまの私とおなじ年齢のときであった。

第一幕は戊戌変法の年（一八九八）と設定している。老舎が生まれたのは、たしか一八九九年だから、彼は自分の生まれたころの、生まれた土地を、時代と舞台に設定したわけである。そして第二幕はおなじ舞台の二十年後、第三幕はさらにその三十年後という設定なのだ、還暦に近づいて、ふと自分の生きた時代をふりかえってみてみるのは、誰にも共通する心理のようである。作家はそれを書いてみたくなる。わたしは同業者として、『茶館』を書いた老舎の気持ち、痛いほどよくわかる気がする。

陳舜臣さんはこのように書き出し、続けて、第一幕、第二幕、第三幕、それぞれを詳しく解説し、最後、次の文章で結んでいます。傍線は編集委員の加筆。

『茶館』の上演は四百回に及び、ヨーロッパでも公演され、老舎の戯曲の代表作といえる。文革で中国の文芸界が蒙った最大の損失は、老舎の死であった。老舎の死を思うたびに胸が疼く。

老舎未亡人の絮青さんは女流画家で、ことし七十八歳になるが、まだ絵筆をとって

おられる。去年、私は絮青さんから「凌霜の菊」の絵をいただいた。『茶館』を観に行く前に、それを取り出して眺めるつもりである。

満員の裕泰茶館の店内には、〈政治的な話はご遠慮下さいという張り紙がなされ、二人の私服刑事が、客たちの話にそっと聞き耳を立てている。



中国話劇「茶館」の一場面。
宮本輝「老舎『茶館』」②より

5. 陳舜臣と巴金(パーチン 1904-2005)は知合い

『六甲随筆』 「日本語断念した巴金さん」

抜粹・引用します。

長いあいだ中国作家協会の主席として、日本にもよく代表団を率いて来られたので、私もなんとかお目にかかった。八〇年代のあるとき偶然巴金さんと同じ北京のホテルに泊まった。巴金さんは代表団長としてヨーロッパをまわり、帰国したばかりであった。同行の作家協会の人にきくと部屋は一階上だった。私は著書にサインして、巴金さんに渡すように頼み、もし邪魔でなければ、これからご挨拶に参上したいと連絡した。ところが驚いたことに、「私のほうから行きます」ということで、私の部屋においてになった。...

陳舜臣さんにはもう一つ、『含笑花の木』 「巴金氏と会う」があります。ここではふれない。

■巴金は生涯に六度来日している。一九三四、六一、六二、六三、八〇、八四年である。

「文化大革命」中、私は職務を干され、批判されたため、知り合い同士が道で逢っても、あいさつするだけの勇氣はありませんでした。そういう時期に、日本の友人たちは到るところで私の消息を尋ね、私との会見を求めたりするなど、問い合わせて来る人が大いにふえそうだったので、「四人組」は私に毒手を下す勇氣がなかったのです。私はこのことをいつも忘れられません。



(石上詔訳 巴金『探索集』(一九八三筑摩書房)付録「私と文学」より)

6. 水上勉氏、陳舜臣さんとの対談で老舎宅に言及

『陳舜臣対談集 歴史に未来を観る』（2004 集英社）収録の水上勉氏と陳舜臣さんの対談です。



対談する陳舜臣(左)と水上勉

『現代視点・中国の群像 項羽・劉邦』（1985 旺文社）より

『陳舜臣対談集 歴史に未来を観る』
第一部Ⅱ 現代に息づく英雄たち 水上勉

この対談は、『現代視点・中国の群像 項羽・劉邦』（一九八五 旺文社）の一章としてのものなので、いきなり、陳舜臣さんは、

陳 項羽と劉邦は対照的な人物としてとりあげられるんですけども、…。

と切り出します。

ところで、今は、こんな内容に触れようとしてこの対談を取り上げたのではない。

私が興味を持ったのは、ほぼ、最後のあたり、一期一会の感動を求めて という小見出しの箇所です。

引用します。傍線は編集委員の加筆。

陳 水上さんは最近たびたび中国へいらっしやいますけれども、中国の風物といえますか、いちばん印象を受けられましたのは…。

水上 私はまだたく狭い考えの男ですので、あまり通用しないと思うんですけども、…北京へいけば北京のちまた、上海へ行けば上海のちまた、成都へ行けば、成都の昔の街がまだ残っておりますのでね。桂林へ行きましても、山を見るより——桂林へ行って山を見ないというわけにはいかないけれども、しかし船で下るよりも、桂林の空港で働いている人たちとか、そればかりに興味があります。

陳 人間ですね。

水上 人間です。まず干し物ですね。司馬遼太郎さんは、私が干し物ばかりノートしているのので笑われたけれども、その干し物というのは、やはり人間の物干し場でしょう。家々には必ず干し物がございます、それを裏にしたり、あるいは表にしたりして干している。いろいろございますね。その干し物を見ていると、なごむというのかな、そういうところがございます。また食べ物なども興味をもつて歩いていますと、十二日や十四日の旅行はなにもしないですぐすんでしまうということですね。ですから表敬も息り、まことに不細工な訪問者でご迷惑をかけるんです。…。これは一期一会です。

陳 そうですね。

水上さんの書かれたものを読んでいますと、上の人も下の人もたいへん親切だというか、心から歓待しているような様子が目に見えるようですね。

水上 それは礼節の国です。…。このごろはとくに私どもも友人一般の家へ

招かれるということもございまして、四合院というような家がございます。そういう所へ行きますと、陳さんもご存じだと思いますけれども、その四合院は全部自分のものじゃない、ここでは隣りの家があつて…。

陳 共同ですね。

水上 ちようど長屋でございましょう。

陳 長屋ですね。

水上 そこに文士がいるでしょう。日本がすでに失ったものが、まだ生き生きしているでしょう。それはやっぱり感動したりひきつけられなければ嘘ですよ。それは文豪の家は大きゅうございますけれども、文豪といつていいだろーうと思うけれども、老舎先生（一八九九—一九六六年）のおうちなんかは小そうございますわね。小さいという用語弊があります、小ちんまりとして、ああ、ここに「駱駝祥子」を書いた人がいたかと思うと、小説の風景が近所から湧いてくる。日本のようにベイごまをやった路地もなくなり、すぐ簡単にビルディングになっていくような感じはまだないですからね。広いお国ですから。

陳 これからどうなるかわからないですけども、しかし広いですからね。まだそんなにスピードを上げないですよ。

水上 だからそういうことなんかもめぐり回りで、時節がいいなど思つてね。うれしくて行っているんですよ。

■傍線部分、水上氏の老舎宅訪問は一九七九年のことです。感情がもれそうになるのを抑えながら話しています。それに対し、陳さんは、老舎の名も口に出しておりません。水上氏の心から距離をおいての受け答えです。

7. 加藤隆則氏のブログより

老舎が残した「自分の死と一緒に壺を割った男」の話

加藤隆則氏のブログ「行雲流水の如く 日本語教師の独り言」

生誕118年 老舎が残した「自分の死と一緒に壺を割った男」の話 2017-02-03 記

以下、転載します。先ず、莫言さんのことです。厳しい言われようです。最近では、意を曲げず、服役中に病死した劉曉波(1955-2017 2012年ノーベル平和賞受賞)のような例もありますが…。

本日、2月3日は中国の作家、老舎(1899-1966)の生誕118年記念である。

「118」は中国人に好まれる数字だが、「人民の芸術家」と評された偉人の生誕記念にしては重苦しい空気が流れている。だからこそ振り返る意義がある。

昨年11月30日、北京で中国作家協会の全国代表大会があり、習近平総書記も席した。席上、同協会副主席でノーベル文学賞受賞者の莫言(モー・イエン)がこう語った。

「(習近平総書記は)優れた人物であり、多数の書を読み、非常に高い芸術鑑賞眼を持ち、専門家だ。習近平総書記はわれわれの読者で、われわれの友人で、当然、われわれの思想の先導者(思想的指引者)だ」

習近平氏は、毛沢東が文芸を政治の道具とした手法にならい、文化人を思想イデオロギー統制の重要な担い手と位置付けている。莫言は政治に迎合し、権力者にすり寄った。莫言は、検閲制度を空港の安全検査になぞらえて失笑を買った前例があるが、「思想の先導者」とまで公言するのは、明らかに文化人のデッドラインを超えている。真理を探究すべき立場にある者として、政治家の個人崇拜に手を貸す発言は、自己保身を図る役人にも劣ると言わざるを得ない。



次は、老舎の死にまつわる話です。

老舎は北京の町を愛し、庶民の生活に温かい目を向け続けた。そして偽りのない人間の真の姿を凝視した。抗日戦争時代は、中華全国文芸界抗敵協会の常務理事として「抗戦文芸」誌を刊行し、建国後は北京市政府から「人民の芸術家」との称号を得た。だが文化大革命を迎えると、一転して紅衛兵から「反革命」のレッテルを張られる。暴行、虐待、侮辱を受けた末、北京北郊の太平湖に入水自殺したとされる。人生最後の1日、朝から晩まで湖畔のベンチに腰掛け、毛沢東詩集を読んでいた姿が目撃されている。

作家仲間の巴金は1979年12月、こう語っている。

「老舎同志は、結局自殺したのか、他殺なのか、または、恨みを胸に入水したのか、迫害にあって亡くなられたのか、私には現在にいたってもしっかりしない。ただ一つ認めなければならないのは、彼の肉体は死んだが、壺は守られたのだ。彼は立派なものをこの世に残している」(下線は編集委員の加筆)

「壺」とは何か。老舎は1965年、日本を訪問した際、井上靖ら日本の作家たちにこんな寓話を残している。

ある骨董好きが身を滅ぼし、物乞いになりながらも手放さなかった名器の壺がある。それに目を付けた金持ちがしつこく譲ってくれと言いつつ寄ってきたが、男は拒み続けた。男が貧困の末に命を絶ったとき、金持ちはようやく自分のものになると思った。だが、男は亡くなる直前、壺をたたき割って壊していた。

老舎が亡くなる前年のことである。その場にいた日本人作家の中には、価値あるものはたとえ敵の手にわたっても後世に伝えるべきだと反論する者もいた。結局、老舎が何を言おうとしたのかは謎に包まれたままだった。4年後、自殺の報が外電で伝えられると、井上靖は『壺』という作品を発表し、「老舎は壺を砕いて死んだと思った」と書いた。

■巴金に「老舎同志を追慕する」『巴金 探索集』(石上詔訳 1983 筑摩書房)という作品があります。一部を抜粋します。

(1977年9月1日の夜)寝つかれないままに、(前日いただいた)井上氏の短編集『桃李記』のページをめくっていると、『壺』という一篇があって、中日両国の作家(老舎と広津和郎)のことが書かれていた。わたしはベッドに横になったまま読み通してしまった。…。その夜は一晚中老舎の夢を見続けた。「友人諸君に伝えてほしい、私は元気だから御心配なく、とね」(カッコの箇所は編集委員の加筆)

私(橘)は、上の枠内、巴金が老舎の死に関し、どうして「壺」のことを言ったのか不思議でした。中国では、誰でもが知っている話なのかなとも思いました。巴金の「老舎同志を追慕する」を読んで疑問氷解!